

## \***京都市PTA連絡協議会会長賞**

### 「働く子供達」

京都府立洛北高等学校附属中学校 2年

溝 渕 こなつ

「働く人」といわれると、あなたはどのくらいの年齢の人を思い浮かべるだろう。きっと、ほとんどの人が20歳を過ぎた大人を想像すると思う。日本では労働基準法第56条によって「満15歳に満たない児童は労働者として使用してはならない。」ということが定められている。私達中学生には、大人が私達を養い私達は養われる、という概念があり、それが常識だと思っている人も多い。しかしそれは、世界に共通することだろうか。

私は去年の冬、家族旅行でカンボジアに行った。カンボジアの街を歩いていて私は衝撃的な光景を目のあたりにした。私と年齢のさして変わらない子や私よりも小さな子が物を売っていたり、一輪車バケットで大量の土を運んでいたりしていたのだ。私は以前学校の教科書で戦後間もないころ、海外の多くの国や地域で子供達が労働者として扱われていた、という文を読んだことがあったが、それはもうずいぶん前のことで戦争が終わり平和な日々をすごしている今、子供が働くことなどほぼないと思っていた。しかしそれは大きな間違いだった。今もお、貧しい生活を少しでも打開するために彼らは学校にも行かず、無心で働いていたのだ。私はとても胸が苦しくなった。私は観光で外国に行き、日本でもそこそこ豊福な生活を送り決まった時間に学校へ行って勉強している。働くなんてもってのほかだ。だが今この瞬間にも今日を精一杯生きるために過酷な労働を強いられる子供達がたくさんいる。彼らは学校には行けないのだ。

小中学校が義務教育とされ、高校や大学までも無償で授業を受けられるようにしようとも言われる日本では勉強することや学校へ行くことを「面倒臭い」とか「やりたくない」というだけの理由で拒否してしまう人もいる。一方で海外などの貧しい子供達は勉強したくてもできないのだ。お金がない、家を少しでも支えなければならない、など様々な事情で。勉強できる環境のあるなかで、自らの気持ちの赴くままに勉強を拒否する人がいて、勉強したくても働くことを強いられて満足に学ぶことができない人もいるのは理不尽だと私は思う。子供は学校へ行って勉強したり、友達と楽しく遊んだりして自分の将来やりたいこと、なりたいたいものを見つけ、自らの可能性を広げることが楽しいんじゃないか。今を生きるのに精一杯で大人から与えられた重労働しかさせてもらえないのはとても寂しい気がする。

今、日本に住んで平和に毎日学校へ行く私たちが、幼くして働くという道しか残されていない彼らの気持ちを理解するのは正直難しいだろう。でも貧しい地域での教育の現状を理解することはできる。そして、私達が今、満足に教育を受けられる環境にいることは、決して当たりまえではないことも分かるだろう。そうすれば自ずと自分が今置かれている環境の貴

さに気づくことができるだろう。

そしてもう一つ、現代の中高生だけでなく、社会的にも「小さな子供達の労働」について詳しく知り、考えることが必要だろうと私は思う。憲法第九条に基づいて一切の戦術や武器を保持しないことが誓われ私たちは少し、「平和ボケ」しているような気がする。大人が養い子供はのびのびとよく遊びよく学ぶ。これが理想の社会像というべきではないだろうか。そして理想であると同時に、とても得難いものであろう。

今のスラム街や貧しい地域の子供達を私たちの手で救うのは難しいかもしれないが、私達がそれを知る、と言うこと。現在の社会がどれほど尊いものか、を考え、一日一日を懸命に生きること。これが今、私達に求められる最大限のことだろう。そしてその認識を深めるだけでも、社会全体が少し、活気づいたり、目をキラキラさせた学生や大人が増えるのではないかと、私は思う。

